

中村武羅夫

小杉天外氏



小杉天外氏



余の小杉天外氏に面会したのは、小田原から芝の白金台町に移られて間もない、夏の或る一日のことである。

午後二時前の夏の日射しはチラチラと白く眩しく頭の上に照って、電車から降りて坂道を歩いた身には、汗がジツトリ体に流れて、風のない日に浴衣はベツトリ肌に付いて、何とも言えぬ気味悪るさである。

潜くぐりを潜ると、少し広い庭になって、門から玄関まで砂利が敷いてある。玄関の傍の松の木蔭に、白と茶の斑

の犬が丸く寝そべって居る。余の足音をきいて丸くなつたまま目を開けて些つと見たが、直ぐ其まま眠つて了つた。余は、何と云うことなしに、此の犬を見ると同時に、偶と「コブシ」の中に描かれた犬のことを思った。

玄関に立って見ると、家の中は眠つたように寂と静まつて居る。家の廻りの木蔭で鳴く油蟬の音が、炒り付くように蒸し暑く聞える。

玄関から見通しになつた西洋室に、籐で編んだソファを置いて、其上に午睡の夢を貪つて居る浴衣を着た人があつた。案内を乞うと左りの方から取次ぎに出たのは

小間遣らしい若い女である。名刺を出して来意を告げると、女は其すやすやと午睡の夢の安らかな人の所へ行つて、取次いだが、直ぐ再び出て来て「此方へ」と言われるままに上ったのは、広い西洋室の応接室である。

ソファア-の上の人は既に居なかつた。其上には読みかけの本が伏せてあつた。

室は二十畳ぐらいの西洋室である。真中に大きなテーブルを据えて、椅子が向い合せに六脚並べられた。室の中には別に目立った装飾もない。濃い色を使って描いた水彩画の薔薇の花の額が一面掛つて、室の隅に大きな硝

子張りの箱の中に、美しい花籠が置かれてあつた。室の中に目立ったものは、其二つ。テーブルには白い掩いが掛つて、上に団扇台が一つと、錆びた呼び鈴が一つ置かれた。

少時待つて居る間に、入つて来られたのは天外氏である。今迄、ソファア―の上に掛つて居られた人は天外氏であつた。寢覚めの顔を洗つて来られたのだ。

天外氏は、余と斜めに、向い合つて椅子に腰を下された。背の余り高くない、髪はぴったりと頭にくっ付いて、二重瞼の目の丸い、鼻の高い人である。見た所、顔の特



色は無論其大きい目で、こめかみ蟀谷から削けた頬へかけて、恐ろしく神経の過敏らしい人である。

声は鋭い所があつて能く透るが、発音には矢張り東北の訛りが取れない。

座談は決して上手と云う方ではないが、話される語氣に一種の熱がある。心にもない可い加減なことを間に合せに話して、お茶を濁して済すなどと云つたような、不真面目な軽佻な所がない。句々其口にされる所は、皆肺腑を絞つて出る所の信念である。従つて語氣に熱もあり。力もあり。聞く人に感動も与える。惻々として、人を動

かすの力がある。

天外氏は愛嬌のある人でもない、又、己れを低くした人でもない、体も小さく、見た所脾弱に見えるが、何所となく、剛頑人に屈しない、精悍の気が溢れて居る。お世辞もない。自ら高く止って居るような人であるが、其人物に厭味がない。余は斯うした剛直な男らしい天外氏の態度が好きである。

天外氏は己れの信ずる所を決して一步も曲げる人ではない。恐ろしく自信の強い人である。天外氏は自信の人である。強い自信は犯すことの出来ない權威である。絶

対の権威である。此の自信あり。権威ある人の気焰や罵倒は実に痛快なものである。余は天外氏の話を聞いて居る中に、幾度び痛快な思いに胸を躍らしたであらう。

罵倒も気焰も権威なき人々の口から之れを聞けば、一種苦々しい思いか、さもなければ滑稽の感じがする。要するに聞き苦しいものである。然し、自信あり、権威ある人の口から発せられる所の罵倒や気焰は、痛快なる一種の批評を聞くが如き思いがする。

天外氏自身は、只、自分の感ずる所、信ずる所を、忌憚なく話されるのであらうが、それが、吾等の耳には、

如何にも痛快な批評と響く、何となく小気味好く聞える。何人も恐れず、何人にも遠慮せず、忌憚なく吾が所懐を吐かれる。天外氏の態度は、如何にも男らしくて、小気味が好い。余は好きである。

天外氏は真面目なる人である。総ゆるることに対して、吾が全力を挙げなければ承知出来ない人である。間に合せの出来ない人である。真乎に怒り真乎に喜び、真乎に悲しみ、真乎に泣き得られる、極めて純な真面目なる人である。

天外氏は、其創作にかかる度びに、必らず一世一代の

作、吾が骨を削り、肉を殺ぐの苦を積むの作であると云うことを告白する。或人は一世一代の作が幾度出るのかと、皮肉な冷笑を与えたことがある。然し、何れの作に対しても、それ丈けの熱心と意気を以て努力を積まれる。芸術に対する天外氏の其深い信念は、誠に畏敬すべきものではないか、尊むべきものではないか。恐らく現時文壇の人々の中で、天外氏ぐらい芸術の權威を尊敬し、芸術に対する深い憧憬と執着を以て、真面目な努力と労作を積んで居る人は少なからう。

一面文芸を冷笑しながら、而も其文芸に依って生きて

行く人々を見る度びに、余は彼れ等の面上に唾して遣りたい程憎悪の念を覚える。少なくとも文芸は、合力的のものである。然るに、文芸其物に対して何の尊敬も、憧憬も持ち得られない人間が、何うして真乎不朽の生命ある文芸を生み得よう。文芸に携わる人間でありながら、文芸其物の価値と權威を無視し、文士を冷笑する人間は、文芸の敵である。宜しく彼等は文芸の外に驅逐すべしである。

文芸の權威を無視し、文芸の価値を冷笑するを見むとする人々の多き今の文壇に、余は小杉天外氏の如く、文

芸を尊重して、其畢生の努力を文芸の爲めに濺そそがれる人があるかと思えば、涙滾れる程嬉しい。斯かる人の手に、誠の生命ある文芸は生れるのだ。其出来上った作物の価値や、好悪は何うでも可い。只文芸に対する其真面目の態度が嬉しいのである。

天外氏は総べてに對して真面目なる人である。真乎に喜び、真乎に怒り、真乎に泣くことの出来るぐらい、尊い、そして美しいことはない。現代人は其真摯の念を欠く。真面目を欠く。真実衷心より動くことの出来ないのが、現代人の弱点である。現代人は吾其物を内觀し直ち

に批評して、冷笑して了う。怒、笑、悲、泣くのも、それは衷心から怒るのでもなく、笑うのでもなく、悲しむのでもなく、泣くのでもない。怒、悲、笑う吾其物を、観察し、批評して居る。従つて、吾を忘れて真乎に怒り、真乎に泣くことが出来ない。総べてに対して吾のベストを尽すことが出来ないのが、現代人の短所である。嘆くべき所である。時代の罪だ。

天外氏には然うした短所がない。吾が信ずる所に向つては、吾の全力を尽すことの出来る人である。其所が天外氏の尊い所である。真面目な所である。天外氏は、現



代人の如く深刻に自己を批評しない。従つて人物に皮肉な所がない。醒めた頭に依つて、総てのものを誤解し尽した人間は、皮肉に出るか、冷笑に出るより外に仕方ない。現代人の皮肉冷笑は、誠に余儀ない苦悶の結果である。自己を批評し得られない人を以て、自意識がないのだと云うかも知れぬ。然し、自意識と云うことが何れ丈け偉いことなのだ。総ての人々の自意識が進めば進む程、吾等の平和と幸福と慰安の楽土は次第に亡びて行くのだ。破壊されて行くのだ。自意識が明らかになればなる程、信も、愛も、友も、恋も亡びて、個人と個人との関

係は一種の鬪いになって、世は修羅の巷となつて了う。そして世は猜疑と、嫉妬と、呪咀と、皮肉と、冷笑の権化となつて了う。世は悪魔の世界と変る。

自意識などは何うでも好い。余は天外氏の如く、總ての事に真面目に、自己の全力を挙げて、尽し得られる人に対して、無上の尊敬と欣慕の念を持つ。

余は、天外氏の文壇に対して、己れを重んじた態度に、限りなき敬意を持つ。今の文壇、漱石氏と天外氏を除いて、己れを自重せる作家が幾人あるか、自ら、己れを軽んじた作家が多い。余は天外の剛直にして人に下らず其

強い自信を以て、吾が信ずる所、思う所に進んで行かれる其態度を思うごとに、何となく一種の壮美に打たれる。

天外氏の処世上に己れを持する態度も余は好きである。人は以つて貴族的なりと云う、其貴族的なるの語は、多少冷笑の意味を含んだものであるが、余は、貴族的に処して行き得られるのは、偉いと信ずる。余の従来面会した文士の中で、真に恥しくない中流の生活をして居る文士は、夏目漱石氏と、小杉天外氏より外にない。

余は、天外氏の己れを卑しくしない総ての態度が好きである。

其真面目な、真摯な態度、余は天外氏に多少の敬意を  
払わずに居られぬ。





日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館